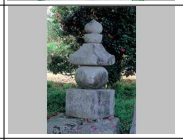
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	旧籏山家住宅	きゅうはたやまけじゅうたく	1棟	三次市三良坂町灰塚	昭53.1.21	桁行15m，梁間9.1m，入母屋造，茅葺		建築年代を示す資料はないが，手法から江戸時代，18世紀中頃の建築と考えられる。平面は整形四間取で，入口を入った左手にかなり広い土間をもち，右手に床上部が連なる。上屋柱は適当な間隔で比較的整形に残存しており，それは土間では太い多角形の曲がり材を多用しているが，床上部では整形された鉋（かんな）仕上げのものを用いている。実年代はさして古くないが，構造手法に相当古風なものを残しているのがこの家の特徴である。 平成12年（2000），現在地に移築された。		内部見学は事前に連絡が必要（三次市教育委員会　電話0824-64-0092）
国	重要文化財（建造物）	奥家住宅 主屋　1棟 附　本宅普請万覚帳　1冊 土蔵　1棟 附　本宅普請萬覚帳　1冊 附　家相略図　1枚 宅地　1,889.25平方メートル	おくけじゅうたく	2棟	三次市吉舎町敷地	昭53.1.21 平28.7.25（追加指定）	桁行16.1m，梁間9.2m，入母屋造，茅葺，四面庇付，桟瓦葺 台所部／桁行6.3m，梁間10.0m，両下造，南面主要部に接続，桟瓦及び鉄板葺		江戸時代，天明8年（1788）の建築で，建築年代の明確な民家としては数少ないもののひとつである。普請帖（ふしんちょう）と，小屋裏棟束（こやうらむねづか）に棟札が残されている。 間取りは六間取に台所がある形で，規模の大きい当初の形をよく残している。構造は内法をすべて差鴨居でかため，柱数も少ない上等な構である。主屋内に入って見応えがあるのは土間上の梁組みで，太い梁が互い違いに五重におよび，頑丈に組み上げられた姿は圧巻である。建築年代も明らかであって，この地方の民家を代表するものである。		
国	重要文化財（建造物）	旧真野家住宅	きゅうしんのけじゅうたく	1棟	三次市小田幸町大平 広島県みよし風土記の丘構内	昭49.4.25（県指定） 昭55.1.26	木造平屋，入母屋造，平入り，茅葺，桁行14.9m，梁間8.9m		構造がきわめて古く，各所に古式を残しており，江戸時代，17世紀後半頃または更にさかのぼるとの説もある。主屋の表側を除く三方はすべて大壁となり，小舞は雑木や丸竹を混用し，大壁の塗厚は20cm以上である。架構は梁行が二張間で，二ヵ所だけ梁受桁を用いて柱を抜いているほか，すべての柱が原型どおり整然と並んでいる。奥の「でい」と言われる室にはこの時代としては珍し床の間があった痕跡がある。 この建物はもともとは世羅郡世羅町戸張に建っていたのをみよし風土記の丘構内に移築したものである。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
国	重要文化財（考古資料）	広島県矢谷古墳出土品 玉類 碧玉管玉残欠共　5箇 ガラス小玉　3箇 鉄ヤリガンナ　1本 鉄刀子残欠　2口（以上主体部出土） 特殊壺　1箇 特殊器台　2箇分（以上周溝出土）	ひろしまけんやだにこふんしゅつどひん		三次市小田幸町	平6.6.28			これらが出土した矢谷古墳（史跡，三次市東酒屋町）は，三次盆地南縁の丘陵上にある弥生時代後期末から古墳時代初頭（3世紀）の四隅突出型前方後方形の墳墓である。 出土品は，最も規模の大きな木棺から出土したガラス小玉・碧玉管玉（へきぎょくくだたま）と，他の埋葬施設から出土した（やりがんな）や刀子（とうす）片などのほか，墳丘上や周溝内から出土した鼓形器台（つづみがたきだい）・壺・甕（かめ）及び特殊器台・特殊壺の土器類である。 特殊器台は，埴輪の前身とされ，弥生土器の器台が大きく伸張し，葬送儀礼における供献用具として，特殊壺との組合せで独自の変化を遂げたものと考えられ，その分布は岡山県を中心に，広島県東部から山陰地方の一部に及ぶ。 矢谷古墳出土品は，古墳出現前における墳墓のあり方（葬送儀礼），吉備と出雲との関係を推測することができる好例である。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
国	重要有形民俗文化財	江の川流域の漁撈用具 漁撈用具　1,226点 附　漁場関係資料　27点	ごうのかわりゅういきのぎょろうようぐ	1,226点	三次市小田幸町　広島県立歴史民俗資料館	平11.12.21			江の川は，広島県山県郡芸北町阿佐山を水源とし，島根県江津市で日本海に注ぐ中国地方最大の河川である。 この資料は，江の川の全流域を対象に収集された漁撈用具のコレクションで，広島県立歴史民俗資料館が，昭和54年（1979）の開館以来，漁撈民俗調査を継続的に実施するなかで収集した1,800点余りに及ぶ資料の中から精査し体系化したものである。 収集資料は，網漁用具，釣漁用具，突鈎（つきばり），漁用具，陸穿（かんせい）漁用具，鵜飼漁用具，舟及び関係用具，運搬・保存用具，加工・販売用具，漁具製作・修理用具及び附として漁業鑑札類など漁場関係資料である。 本資料は，江の川流域で川漁を行った人々が使用した漁撈用具からなり，この地域の河川漁撈の実態や漁撈文化を理解するうえで貴重な資料である。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
国	史跡	浄楽寺・七ツ塚古墳群	じょうらくじ・ななつづかこふんぐん		三次市高杉町	昭47.10.12 昭50.2.7 （追加指定）			三次盆地の南東，馬洗川左岸の沖積地をのぞむ比高30～50mの丘陵上に分布する古墳群で，中国山地における群集墳の典型である。浄楽寺古墳群は丘陵の下手北西半に116基が分布し，径45m，高さ6mの円墳を中心に径10～20mの円墳が丘陵上に群在する。円墳のほか帆立貝式古墳2基，方墳4基を含む。七ツ塚古墳群は南東上手の丘陵頂部付近に，60基が分布する。全長27mの前方後円墳や径31.2m，高さ3.8mの円墳を含むが，その規模は前者より小さい。埋葬施設並びに出土遺物からみると，古墳時代中期～後期（5～6世紀）の古式の群集墳である。 なお，この両古墳群一帯約30haの地域は，広島県立みよし風土記の丘として環境整備されている。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
国	史跡	花園遺跡	はなぞのいせき		三次市十日市町字大久保	昭53.1.27			若宮古墳などの所在する丘陵のほぼ中央に位置し，標高190mの頂部から北の傾斜面にかけて，方形台状の墳墓並びに方形周溝墓多数が検出され，そのうち台状墓3基が指定保存されている。第1号台状墓は，この墳墓群の最高所にあり，東西32m，南北18mの長方形をなし，北辺は石材を高さ1.3mにわたって貼っている。第2号台状墓は第1号の北西，第3号台状墓は第1号の北，第2号の東に接して分布するが，その規模は小さい。各墳墓には，多数の土壙，箱式石棺，石蓋土壙の埋葬施設がある。遺物としては，管玉，弥生土器，土師器があり，墳墓の主体は弥生時代後半（1～3世紀）から古墳時代の初頭（3世紀後半）にあり，古墳成立直前の様相を示す墳墓群である。		
国	史跡	矢谷古墳	やだにこふん		三次市東酒屋町字松ケ迫	昭54.3.13			矢谷古墳は，三次盆地南縁の標高230mの丘陵上にあり，三次工業団地造成事業に伴い昭和52～53年度（1977～1978）に行われた発掘調査により検出された。弥生時代中期末から古墳出現前まで（1～3世紀）中国地方山間部及び山陰・北陸地域にかけて盛行する四隅突出型墳丘墓を2基合わせたような形態をもち，全長18.5mである。埋葬施設は木棺7基・箱形石棺2基・土壙など計11基があり，後方部中央にはこの墳丘墓の中心主体と考えられる最も大きい木棺が存在する。ここから出土した特殊器台や特殊壺などの遺物は重要文化財に指定されている。古墳出現前における地域社会のあり方，吉備と出雲との交流，関係を示す重要な墳墓である。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
国	史跡	寺町廃寺跡	てらまちはいじあと		（寺跡）三次市向江田町 （窯跡）三次市和知町大鳴	昭59.5.25			三次盆地東端の四周を丘陵に囲まれた場所の，南面する丘陵上に位置する。昭和54～57年度（1979～1982）までの発掘調査により東側に塔跡（約11m四方の[84a6]（せん）積基壇），西側に金堂跡（東西15.7m，南北13.4m，[84a6]積基壇），奥側に講堂跡（東西25.1m，南北14.7m，[84a6]積基壇）の法起寺式伽藍配置で7世紀中葉の寺院跡である。出土遺物には，単弁，複弁の蓮華文軒丸瓦，[84a6]，鴟尾（しび），小仏頭（しょうぶっとう）などが出土しているが，特に軒丸瓦の瓦当面下端には，いわゆる「水切り」と称せられる削り出しが認められる。『日本霊異記』にみえる備後三谿寺に比定され，郡の大領の妃による建立，百済の僧弘済の招請など，地方寺院には珍しい建立の由来並びに朝鮮との直接的な関連を示す。なお，寺院跡の北西約1.2kmには寺町廃寺跡への瓦を供給した大当瓦窯跡が確認されている。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	史跡	陣山墳墓群	じんやまふんぼぐん		三次市四拾貫町，向江田町	平12.12.20			陣山遺跡は，丘陵尾根線から東側斜面にかけて築造された1～5号墓の5基の四隅突出型墳丘墓からなる。1～5号墓の南北延長は約40m，東西幅は約8mである。墓域は1号墓と2～5号墓との2つに大きく分かれ，1号墓は2号墓の盛土下に造られるとともに他の墳墓と主軸を異にしている。一方，2～5号墓は墓域を設定することにより同一区画内に企画性をもって規則正しく配列されている。 どの墳墓からもこの地方の弥生時代中期後葉（1世紀）の指標土器である塩町式土器（しおまちしきどき）が出土していることから，限られた期間にこれらの墳墓が造られたものと考えられる。 四隅突出型墳丘墓は，弥生時代中期後葉から古墳出現前（3世紀中頃）にかけて，中国山間部，山陰，北陸地域に分布するもので，古墳の出現を考える上で重要な手がかりになると考えられている。陣山遺跡の例は初源的で，この地域における首長の動向や四隅突出型墳丘墓の起源を探る上で貴重である。		
国	天然記念物	船佐・山内逆断層帯	ふなさ・やまのうちぎゃくだんそうたい		三次市畠敷町二本松 庄原市山内町深田山 安芸高田市高宮町佐々部	昭36.5.6			船佐・山内の逆断層帯は，第四紀（約200万年前～現代）の地殻変動を示すものである。 船佐の逆断層帯は，高宮町佐々部（ささべ）植谷（うえたに）を中心として東西2kmにわたって点々と露頭（ろとう）があり，基盤岩の中生代の白亜紀（約1億4300万年前～約6500万年前）花こう岩が新第三紀中新世（約2500万年前～約520万年前）の備北層群（びほくそうぐん），およびその上に不整合にのる第四紀初期の甲立礫層（こうたちれきそう）の上に，北に30度傾斜する低角度で衝上している。 山内の逆断層帯は，三次盆地北辺から庄原市山内町まで16kmにわたって山麓に連続して追跡され，古い基盤のひん岩とその上に堆積した第三紀中新世備北層群の基底礫岩層が上位の備北層群砂岩層上に押し上げられている。 この逆断層が第四紀以後の新しい断層で，中国山地や瀬戸内海形成史上，貴重な資料である。		
県	重要文化財（建造物）	熊野神社宝蔵	くまのじんじゃほうぞう	1棟	三次市畠敷町	昭28.10.20	校倉，入母屋造，桟瓦葺		校子（あぜこ）の断面形式や材料の古さ，風蝕のぐあい，それに校子上の斗組（ますぐみ）の風格等から考えて，室町時代末期（16世紀）に三吉氏によって寄進建築されたものと思われる。床下及び軒以上の屋根は後世の改修である。 枇杷板（びわいた）に胡粉（ごふん）下地の上に墨で絵が描かれ，入母造（いりもやつくり）に向拝付（こうはいつき）という屋根の形態とともに，校倉建築では珍しい例となっている。 熊野神社は旧名若一皇子（わかいちおうじ）神社と言い，中世にはこの地方の領主であった三吉氏の尊崇をうけていた。		
県	重要文化財（建造物）	石造五輪塔	せきぞうごりんとう	1基	三次市布野町上布野	昭36.4.18	花崗岩製	高さ2.3m	五輪塔は地・水・火・風・空の五大，つまり仏教概念の一切の物質を構成している要素を示したものである。 この松雲寺の五輪塔は，布野村内にあった黒平城の城主が出家し宗円と号したが，その勧進によって建立されたものと言い，同寺では開山の墳墓として今日まで伝えてきたという。塔の基礎（地輪部）に鎌倉時代の元亨2年（1322）の刻銘があり，広島県における在銘最古の五輪塔で，作もすぐれている。		
県	重要文化財（建造物）	旧佐々木家住宅	きゅうささきけじゅうたく	1棟	三次市三和町敷名字猟師岩山	昭62.3.30	桁行七間半，梁間四間半，茅葺，平屋建		江戸時代中期（17世紀後半～18世紀前半）の農家建築である。表の「板の間」隣りの「でい」が1間間の4畳で，奥に神座らしい床がつけられ，あたかも8畳出床の形の室があるなどの特徴を有し，古式の農家の間取りの様式をよく伝えている。 もとは三和町上壱にあったがその後解体され現在地に移転された。		連絡先：三次市教育委員会（0824-64-0092）
県	重要文化財（建造物）	大慈寺観音堂 附　厨子　1基 　　棟札　2枚	だいじじかんのんどう	1棟	三次市吉舎町吉舎	平1.11.20	方三間，入母屋造，薄板鉄板葺，唐様仏堂		戦国時代の永禄12年（1569）に建てられた唐様の仏堂である。江戸時代中期（17世紀後半～18世紀前半）と明治末期に大きな改造を受け，天井，建具は失われ，低い床が張られ，屋根，入口，仏壇の向きが替えられる等の変更が加えられているが，建具を除いては当初の形態がよく残っている。 建築形態はとくに贅を凝らしたものではないが，時代の特色をよく示している。 大慈寺は吉舎東方山中にあり，応永28年（1421）に和知信濃守氏実によって開かれた禅宗寺院である。開山の宗綱は三原市の佛通寺開山愚中周及の高弟であったという。観音堂は永享11年（1439）に和知時実が建立したが，その後焼失し永禄12年に再建された。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色十六善神像	けんぽんちゃくしょくじゅうろくぜんしんぞう	1幅	三次市三良坂町田利（三次市小田幸町　広島県立歴史民俗資料館寄託）	昭33.1.18	絹本著色	縦125cm，横60cm	中尊，脇侍の円光の金線のくまどりがよどみなく鮮やかな良質の金泥の描線であること，画絹（がけん）に一幅半の織目の荒い素絹を使用していることなどから室町時代中期（15世紀前半頃）の作と思われる。 釈迦は宝座に結跏趺坐（けっかふざ）し，身光頭光の二重円の光背をそなえ，左手をひざに右手は説法印を結び，その頭上高く宝珠を飾った天蓋を掲げている。前方左右には白象に乗る普賢，獅子に乗る文殊の二菩薩の脇侍と，左下方には玄奘（げんじょう）三蔵法師求法の姿を描いている。その他画面左右に十六神を配している。 所有者の田利八幡神社は上下川沿いの低丘陵斜面に位置し，鎌倉時代（1192～1332年）にこの地域を治めた地頭・広沢氏によって勧請されたと伝えられる。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
県	重要文化財（絵画）	絹本著色観音三十三身像	けんぽんちゃくしょくかんのんさんじゅうさんしんぞう	4幅	三次市吉舎町吉舎	平1.3.20	絹本著色，軸装	縦119.0cm，横61.0cm	室町時代（1333～1572）の作と推定され，応永31年（1424）出雲国仁多郡阿井郷（島根県仁多郡仁田町）の月渓良運が寄進したと大慈寺開山宗綱禅師の「宗綱語録」に伝えられることから，ほぼその頃とみられる。 『法華経』の観世音菩薩普門品第二十五によれば，観音は三十三身に変化（へんげ）して法を説くということが見える。大慈寺の4幅は，その三十三身像を表現したもので，3幅には各8体，1幅に9体が描かれている。その描写は一尊ずつ丁寧に描かれ，彩色は金泥部はいわゆる盛上彩色を施しており，その他，丹，朱，群青，緑青や，紫，茶，黄，その他と多彩な色を用いている。尊形部分のみ後世に修復したとみられる。 大慈寺は禅宗寺院で，三原市・佛通寺を本山とする仏通一六派の一である。中世，和智氏の崇敬を受けていた。		
県	重要文化財（彫刻）	木造薬師如来座像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	三次市三良坂町仁賀	昭33.1.18	寄木造	像高55cm，膝張42cm	福善寺は応永30年（1423）の創建と伝える田利（たり）八幡神社の別当寺で，今は曹洞宗の寺であるが，もとは真言宗であった。 薬師如来はこの寺の本尊で，宝髪は螺髪（らほつ）でなく，切り込みであらわし，肉髻，白毫の痕はなく容姿は素朴であるが，衣文，肌の線に用いられた刀法や用材の使用法は本格的な技法を思わすものがある。ことに背刳り（せぐり）を施して保存に留意し，面相は豊満のうちに威容をたたえた作風は平安時代末期（12世紀後半）の製作と思われる。 ※肉髻（にっけい）…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻（まげ）の形をした部分 ※白毫（びゃくごう）…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光明を放つとされる		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（彫刻）	木造神像 僧形神座像　1躯 女神座像　2躯	もくぞうしんぞう	3躯	三次市三良坂町田利	昭33.1.18	一木造，彩色	僧形神坐像　像高48cm，膝張39cm 女神坐像　像高45cm，膝張30cm 女神坐像　像高38cm，膝張28cm	室町時代の応永12年(1405)，和智元実によって寄進された神像。仏師はいずれも源中納言空心と記録されている。僧侶の姿をした八幡神像と女神2像があり，3躯とも彩色され作調は素朴である。3躯ともに底部に墨書銘がある。 田利（たり）八幡神社は上下川沿いの低丘陵斜面にあり，鎌倉時代（1192～1332）に和智氏一族の広沢氏によって勧請されたと伝えられている。		
県	重要文化財（彫刻）	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	三次市海渡町	昭36.4.18	寄木造，彩色	像高88.2cm，膝張74.2cm	帰海寺の本尊で，黒漆塗でところどころに彩色の痕跡がある。台座に坐るこの像の胎内には墨書銘があり，それによると，天文12年(1543)8月，永真蔵主が住持の時，広沢藤原朝臣豊実を大壇那として，京都烏丸の仏師雲渓の子孫という康正が作った旨を記している。 造立銘のある数少ない作品として仏像彫刻史上の資料となるものである。		
県	重要文化財（彫刻）	木造釈迦如来坐像	もくぞうしゃかにょらいざぞう	1躯	三次市吉舎町吉舎	昭40.4.30	寄木造，玉眼，彩色	像高43cm，膝張35cm	善逝寺（ぜんぜいじ）は，現在，臨済宗仏通寺派の寺で，和智筑前守資実の開基と伝えられる。胎内の墨書から，応安2年（1369）藤原師実が同寺の本尊として寄進し，宝徳3年（1451）修理したことが明らかである。玉眼，彩色の保存もよく，地方仏教史上の貴重な資料である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	三次市吉舎町清綱	昭40.4.30	寄木造，漆箔	像高96cm，膝張75cm	浄土寺は，応永14年（1407）南天山3代城主和智信濃守師実開基の知智氏の菩提所で，もと臨済宗のち浄土宗に改宗している。胎内の墨書から，同寺の本尊として七代和智筑前守豊広が天文4年（1535）に寄進したことが明らかであり，かつ保存が完好である。地方仏教史上の貴重な資料である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造日蓮上人坐像	もくぞうにちれんしょうにんざぞう	1躯	三次市向江田町 （三次市小田幸町　広島県立歴史民俗資料館寄託）	昭53.1.31	寄木造，玉眼，裳懸座式台座	像高13.5cm，像幅14.7cm 台座／高さ4cm，横10.5cm，幅8.4cm	本像は玉眼入りの小品で，裳懸座（もかけざ）式台座と一体をなし，その下の礼盤座（らいばんざ）底部の板張に文明5年（1473）に真浄坊日伝が寄進したことを示す墨書があり，この木像の製作年代を推定できる。本像は，右手に笏（しゃく）を持ち左掌は開いているが，経巻を持っていたと思われる。顔はすこぶる強豪鋭利で堂々としており，傑僧日蓮の面影を十分伝えている。 ※日蓮（1222～1282）…日蓮宗の開祖		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	三次市吉舎町清綱	昭58.3.28	寄木造，装飾複合蓮座，頭円光背	像高51.5cm，膝張39.5cm	本像は，吉舎町南天山に城を築いた和智氏の3代目，和智実勝によって応永14年（1407）に創建された浄土宗の寺院である浄土寺に所蔵されている。像の仕上げ，著色はよく時代色をあらわしており，寄木の技法を知る好資料である。破損もなく，台座の型式も時代の特徴を具現している。また，室町時代末期（16世紀）の作である当寺の本尊像とあまり時代のへだたりを感じさせない作とみられ，保存も良好である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像 附　体内仏，木造阿弥陀如来坐像　1躯	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	三次市吉舎町敷地	昭58.3.28	寄木造，玉眼	像高43.5cm，膝張35.5cm 胎内仏／像高18cm，膝張15cm	西光寺は中世にこの地方を支配した和智氏にゆかりのある寺で，この像も同寺に古くから伝えられている。眼は玉眼で顔面・胸部に梨地の金泥（きんでい）を塗っている。彫法に翻波（ほんぱ）式刀法を残すなど古い形を残している。保存がよく全体的にバランスの整った像である。室町時代（1333～1572）の作である。 なお，体内仏は寄木造，像高18cm，膝張15cmの小像で，法衣の文様などから江戸時代（1603～1867）のものと考えられる。		
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	三次市畠敷町 （三次市小田幸町　広島県立歴史民俗資料館寄託）	平2.12.25	檜材，一木造（像身），玉眼，上から蓮台・円形敷茄子・八花形反花座・八花形二重框座から成る蓮華座	像高18.3cm	像容は定印を結び，衲衣を通肩（つうけん）に着し，玉眼を入れた坐像で，熊野神社の前身である王子権現に，天文4年（1535）三吉致高・同高勝が奉納した典型的な本地仏である。厚い衣の襞など，うねりが大きく重たい感じで，室町時代後期（16世紀）の特徴をよく示しており，同時代の基準作となりうる貴重な仏像である。 ※衲衣（のうえ）…僧などが着る一枚布の衣 ※玉眼（ぎょくがん）…眼球部をくりぬいて内側から凸レンズ状の水晶をはめたもの ※定印（じょういん）…阿弥陀如来に特徴的な印相の中で悟りを表わす印相		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
県	重要文化財（彫刻）	木造地蔵菩薩坐像	もくぞうじぞうぼさつざぞう	1躯	三次市吉舎町三玉	平5.2.25	寄木造	像高48cm	この地蔵菩薩は，もともと中世にこの地方に南天山城を築き，勢力を持った和智氏の持仏（じぶつ）で，和智誠春が毛利氏によって殺された際，城外へ持ち出され，町内の寺院を経た後，宝寿寺に伝えられた。本体は両脚を半跏坐（はんかざ）として，顔の表情も上品で洗練された表現で，生気が感じられるものである。全体的に繊細な彫り上げに終始しており，秀麗な印象を受ける仏像である。保存状態も極めて良く，南北朝時代（1333～1392）の優美さを感じさせる。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（工芸品）	銅鐘	どうしょう	1口	三次市三次町	昭29.4.23		高さ87cm，口径50cm	永和2年（1376）に播州永良荘（兵庫県神崎郡市川町）の護聖寺のために鋳造されたもので，追銘によると長享元年（1476）周防大島三浦本庄（大島郡大島町）志駄岸八幡宮の鐘となっており，大壇那として大内政弘の名前が見える。更にその銅鐘が，どのような経緯を経て三勝寺に納まったかは不明である。		
県	重要文化財（工芸品）	神輿	みこし	1基	三次市甲奴町小童	昭34.10.30		高さ340cm，方213cm	神輿は神霊がお旅所その他へ渡御される際に用いられる乗物で，お輿(こし)とも称される。 この神輿は八角形で，その基盤側面の剣巴（つるぎともえ）文の文様はすぐれており県内では他に例を見ない。また，普通の神輿は各角に柱を立て，内部を一室とした構造形式であるのに，本品は心柱を持つ珍しい構造で，古くはこの心柱に祭神を斎き祭ったのであろうか。この心柱の意味については，大社造りにある大極柱の系統をひくものか，または神輿を振り立てる神輿振りのための構造か今後の研究課題である。 内部左板壁に永正14年（1517）創建の墨書がある。		
県	重要文化財（工芸品）	銅製鍔口	どうせいわにぐち	1口	三次市布野町下布野	昭36.4.18	銅製	直径22.5cm，高さ7.5cm	知波夜比売（ちはやひめ）神社は，備後における式内社17座のうちの一つで，10世紀初めにはその存在が認められる古社である。この社に伝わる鍔口は，建武元年（1334）の紀年銘をもち，県内における在銘最古の鍔口である。 「奉懸鳴神社鐘一枚」 「建武元年才次甲戌十二月十八日施主清二良敬白」		
県	重要文化財（工芸品）	なぎなた　銘藤原輝広尾州	なぎなた	1口	三次市吉舎町三玉	昭38.4.27	薙刀造り，三ツ棟，鎬えは板柾流れに小杢目まじり，肌立って鎬地柾がかる。刃文はのたれ刃に小互の目を交え，刃中に砂流しがかかり，鋩子はのたれ込み尖って返る。茎は少し磨り上げ，先は生ぶで浅い栗尻となり，鑢は勝手下り。彫物は表裏ともに薙刀樋に棒樋があり丸留となる。	刃長51.7cm，反り2.3cm	江戸時代の芸州広島の刀工初代輝広の作である。輝広は福島正則の移封に従い尾張から移住したと言われ，その後広島藩を代表する刀工のひとりとなった。輝広の作風を知るうえの有力な資料で，仕上げもよく抜群の技量のほどを示している。		
県	重要文化財（工芸品）	刀　銘芸州大山住宗重作永禄十一年八月吉日	かたな	1口	三次市十日市東一丁目	昭45.1.30	冠落し造，大鋒，丸棟，鎬え板目刃縦柾交り地沸つく，刃文互の目逆乱交り砂流れかかる	刃長70.3cm，反り1.0cm	宗重は二王真清（におうまさきよ）とともに，中世の芸州刀工を代表する名工で，刀剣古書によると宗重の銘は三代続いたようであるが，初代及び二代作で現存するものはなく，三代宗重の作もきわめて少ない。本品は三代宗重作の数少ない一つで，保存もよくすぐれた作品である。 大山鍛冶は，建武の頃（14世紀中頃）筑前の左一派が大山（広島市安芸区瀬野川町大山）に来住したものであると言われ，現在も鍛冶宅跡や墓地が残っている。		
県	重要文化財（工芸品）	鉄錆漆塗二十八間二方白総覆輪阿古陀形筋兜鉢 附　漆塗兜櫃　1合	てつさびうるしぬりにじゅうはっけんにほうしろそうふくりんあこだなりすじかぶとばち	1頭	三次市十日市東	昭47.4.24		前後径25.7cm，左右径24.0cm，高さ14.8cm，重量1.690kg	この兜は，室町時代（1333～1572）特有の誇張的なふくらみをもった阿古陀形で，錆漆を厚く盛り上げ腰巻も水平となり，[849引（しころ）を欠失しているのが当時流行の笠[849]を付けていたものである。前立の三鍬形（みつくわがた）を欠失し，眉庇（まびさし）の藻獅子の絵革と鉢裏の張革は後補であるが，彫刻渡金は精巧で定形を保ち，保存も良好であり当代を代表する兜鉢である。 備後国山内首藤家に伝来したと伝えられ，天辺の座に定紋の三柏紋（みつかしわもん）が浮彫されている。		
県	重要文化財（工芸品）	鉄製釣燈籠	てつせいつりどうろう	1基	三次市畠敷町 （三次市小田幸町　広島県立歴史民俗資料館寄託）	平2.12.25	鉄製，六角燈籠	総高33.0cm，総廻64.0cm	熊野神社の前身である王子権現に天正8年（1580）比叡尾山（ひえびやま）城主三吉隆亮が奉納したもので，火袋の下部にその旨の銘文が打ち抜き模様の中に刻まれている。 六角燈籠の形態や，打ち抜き模様の優美な彫刻など，工芸美術的に優れたものであり，数少ない安土桃山時代（1573～1602）在銘の釣燈籠として貴重である。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
県	重要文化財（工芸品）	金銅製板塔婆	こんどうせいいたとうば	2基	三次市畠敷町 （三次市小田幸町　広島県立歴史民俗資料館寄託）	平2.12.25		総高62.0cm，台幅20.8cm	熊野神社背後の比叡尾山（ひえびやま）城主三吉致高・隆亮父子が戦国時代の弘治2年（1556），熊野神社の前身である王子権現に寄進したものである。中世末期（16世紀）この地方を支配した三吉氏と神社の関係を示す資料である。熊野神社の前身王子権現神殿左右の柱に打ちつけられたものと思われ，いづれも金銅製の板を三重塔形に打ち抜き，線刻で九輪三層の屋根・塔身・回廊等を詳細に線刻し，台座部分には願文銘文が刻まれている。 精巧に彫金加工されたすぐれた遺品であり，また地域史の資料としても貴重である。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2882）
県	重要文化財（典籍）	紙本墨書大般若経	しほんぼくしょだいはんにゃきょう	25帖	三次市吉舎町吉舎	昭28.4.3	紙本墨書		平安時代の保延4年（1138）播磨国（兵庫県）揖保郡の住人桑原貞助の発願により，同国書写山円教寺（兵庫県姫路市）の僧達が一斉に書写した頓写(とんしゃ)経，いわゆる「円教寺経」で，平安写経の名品の一部である。もとは巻子装であるが，現在は折本装になっている。また，大般若経は本来600巻あるが，25帖だけが伝わっている。 戦国時代の明応2年（1493）守近善秀が願主となって，大慈寺の山麓近くにある吉舎村八幡宮に施入されたと記されている。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（典籍）	法華経版木	ほけきょうはんぎ	61枚	三次市吉舎町桧	昭50.9.19	版木，材質桜	縦25cm，横90cm前後，厚さ2.4～3cm， 刻字面／縦22.5cm，横60cm（30行）と70cm（35行）	版木の材質は桜で，室町時代（1333～1572）の製作。 収蔵場所は，能引寺と言われる禅宗寺院跡で，南天山城主和智信濃守の開基による仏通寺末黄梅院の支配であったという。永禄9年（1566）小早川隆景が仏通寺に法華経版木を寄進しているが，現在仏通寺には当該版木はなく，あるいは隆景寄進の版木が門末の能引寺に移されたものかとも考えられる。 檜村国郡志書出張によると，この版木は鎮守の四王殿に納められ，この版木が村を出ると異変があると記しており，文政年間（1818～1829）以前のかなり前から同寺に所蔵していたと思われる。		関連施設：吉舎歴史民俗資料館 （0824-43-4400）
県	重要文化財（考古資料）	石鎚山古墳群出土遺物 【第1号古墳】 斜縁二神二獣鏡　1面 硬玉製勾玉　3箇 琥珀製勾玉　3箇 碧玉製管玉　42箇 鉄やりがんな　2本 鉄刀子　2口 鉄鏃　41本 鉄短剣　1口 銅鏃　5本 【第2号古墳】 内行花文鏡破片　2面 鉄刀子　1口 鉄やりがんな　1本 土師器片　2箇	いしづちやまこふんぐんしゅつどいぶつ	106点	福山市西町二丁目（広島県立歴史博物館保管） 三次市小田幸町（広島県立歴史民俗資料館保管） 広島市西区観音新町四丁目（広島県立埋蔵文化財センター保管）	平5.2.25	第1号古墳／斜縁二神二獣鏡1面，硬玉製勾玉3箇，琥珀製勾玉3箇，碧玉製管玉42箇，鉄[8746]2本，鉄刀子2口，鉄鏃41本，鉄短剣1口，銅鏃5本 第2号古墳／内行花文鏡破片2面，鉄刀子1口，鉄[8746]1本，土師器片2箇		中国の後漢や三国時代の青銅鏡二面を初めとする石鎚山第1号・第2号古墳出土遺物は，各埋葬主体ごとに遺物の組成がやや相違するが，いずれも古式の様相を示す。特に斜縁(しゃえん)二神二獣鏡や定角式鉄鏃(じょうかくしきてつぞく)，硬玉製勾玉(こうぎょくせいまがたま)類は前期古墳の特徴的な遺物として貴重である。広島県内における古墳時代前期（4世紀）の一括遺物として各様相を代表する遺物といえる。		
県	重要文化財（考古資料）	壬生西谷遺跡出土遺物 内行花文鏡　1面 鉄鏃　1本 碧玉製管玉　10箇 弥生式土器　6箇	みぶにしたにいせきしゅつどいぶつ		三次市小田幸町（広島県立歴史民俗資料館保管） 広島市西区観音新町四丁目（広島県立埋蔵文化財センター保管）	平6.2.28	内行花文鏡1面，鉄鏃1本，碧玉製管玉10箇，弥生式土器6箇		これらの遺物は壬生西谷遺跡（千代田町所在）の墳墓群から出土した中国の後漢鏡，及び鉄鏃・管玉・弥生土器である。鏡は墳墓群のなかで中心となる埋葬施設から出土したもので，完形の内行花文鏡(ないこうかもんきょう)には「長宜子孫(ちょうぎしそん)」の銘がある。完形の後漢鏡を副葬する弥生時代（前3世紀～3世紀）の墓は中国地方では稀で，被葬者はこの地域の首長クラスと考えられる。この時期の首長一族の存在を示す資料として貴重である。		
県	重要文化財（考古資料）	袈裟襷文銅鐸（黒川遺跡出土）	けさだすきもんどうたく（くろかわいせきしゅつど）	1口	三次市小田幸町　広島県立歴史民俗資料館	平成29.12.4		総高28.0cm，最大幅（推定）16.4cm，重量890g	昭和36年，広島県世羅郡世羅西町（現，世羅町）大字黒川字下除地で農道工事にともなって偶然発見された。本体の文様は四区袈裟襷文である。また，鈕（吊り手）の変化に基づく型式分類では，扁平鈕式古段階に分類される。同じ型式の銅鐸は主に岡山県から近畿地方にかけて出土し，兵庫県で鋳型が出土していることから，兵庫県地域を中心に製作され近畿地方以西に分布した可能性が高い。その中で，本銅鐸は山陽側における分布の西端である。 本銅鐸は，近畿地方の銅鐸祭祀が西方へと広がって行く様子を知る上で重要であるとともに，広島県地域における弥生文化の受容・展開過程，さらには広島県地域の弥生文化の地域的特色を知る上での極めて重要な資料である。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
県	史跡	頼杏坪役宅 ※頼は旧字	らいきょうへいやくたく		三次市三次町	昭12.5.28	単層茅葺		頼杏坪(らいきょうへい)は文化8年（1811），50歳を過ぎたころから郡代官，郡廻(ぐんまわ)りとして備北四郡の民政に尽くし，専売制の強化がいかに農民の利益を奪うかに注目し，郡村犠牲のもとに城下町の富強をはかることの矛盾を鋭く指摘した。しかし建議は入れられず，杏坪は，代官を罷免されて文政11年（1828）から3年間，三次町奉行(みよしまちぶぎょう)を勤めた。杏坪は，彼の罷免で郡中が動揺し再び郡廻りを兼務することになったほど，郡民に信望が厚かったという。陶淵明（とうえんめい）の故事にちなんで運甓居(うんぺきょ)と名づけられた三次町奉行当時の役宅（平屋かやぶき）は今もその簡素な遺風をしのばせている。		
県	史跡	三次社倉	みよししゃそう		三次市三次町	昭12.5.28 昭59.11.19（一部解除）			飢饉に備えて穀物を特別に貯えておくことは，中国や朝鮮にも例があり，わが国，古代にも行われた。貢租，課役の負担の過重な江戸時代には凶作のたびごとに飢饉が起り，18世紀頃から全国諸藩の中ではこの制度をはじめる例が見られた。 広島藩の社倉は，海田市の儒者加藤缶楽(かとうふらく)の教えをうけた安芸郡矢野村の神官香川正直(かがわまさなお)の指導によって矢野村・押込村で寛延2年（1749）社倉法による備荒貯麦をはじめたことに由来する。その効果の大きいことを認めた藩では，安永8年（1779）藩内全郡の村々に社倉法の実施を命じ，以後，明治初年まで存続した。 三次(みよし)社倉は頼杏坪(らいきょうへい)が三次町奉行在職中に設けたものである。		
県	史跡	吉寺廃寺跡	よしでらはいじ		三次市吉舎町桧字西山	昭17.6.9	中世の廃寺跡，16個の礎石群		吉舎町檜の西，標高約500mの高位置に存在する中世の寺院跡と言われる。山頂部からやや南東にくだり三方を丘陵に囲まれた南に開いた浅い谷頭に，東西約20m南北約10mの平坦地を設け，そこに桁行五間，梁行三間の南面した建物跡が残る。桁の柱間は両端で約2.8m,その間約3m,梁の柱間はいずれも約2.8mで，南半部には50～60cm大の礎石がよく残っている。「芸藩通志」によると，寺跡の北西数町の場所に，鐘楼跡があるとされている。また，北東の谷には和智信濃守師実の菩提寺，能引寺があったという。		
県	史跡	下素麺屋一里塚	しもそうめんやいちりづか		三次市吉舎町吉舎字下素麺屋	昭19.5.30			慶長9年（1604），幕府は東海・東山・北陸三道に一里ごとに塚(つか)を設け里程とした。広島藩でも，寛永10年（1633）石見・出雲両街道の広さを7尺と定め，36町ごとに土石を積んで塚としエノキやマツの木を植えたが，廃藩後保護するものもなく，現存するものは稀である。この一里塚は福山から出雲に通ずる街道に造られたものの一つで，吉舎の町中にある。近年枯死した塚中央のクロマツは，周囲2.6m，高さ18mに達していた。		
県	史跡	中山一里塚	なかやまいちりづか		三次市吉舎町吉舎字中山	昭19.5.30			慶長9年（1604），幕府は東海・東山・北陸三道に一里ごとに塚(つか)を設け里程とした。広島藩でも，寛永10年（1633）石見・出雲両街道の広さを七尺と定め，三十六町ごとに土石を積んで塚としエノキやマツの木を植えたが，廃藩後保護するものもなく，現存するものははなはだまれである。この一里塚は福山から出雲に通ずる街道に造られたものの一つで，下素麺屋一里塚の東方一里の地点にある。塚のマツは枯死し，近年若木が植えてある。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	岩脇古墳	いわわきこふん		三次市粟屋町字柳迫	昭32.9.30	円墳	直径約31m，高さ約3.5m	三次市街の西方丘陵上にある円墳で，江の川合流地域を一眺にできる場所である。直径約31m，高さ約3.5mの規模で，葺石，埴輪などの外表施設はない。墳丘頂部には，長さ2.4m，幅70cm，高さ55cmの竪穴式石室を中心に，箱式石棺4基と石蓋土壙（いしぶたどこう）1基の6基の埋葬施設があり，家族墓的性格が強い。この古墳の東南に接して2基の小円墳があり，いずれも箱式石棺を主体とする。		
県	史跡	若宮古墳	わかみやこふん		三次市十日市町花園	昭32.9.30	前方後円墳	全長約39m，高さ3.5m	三次駅南東の丘陵頂部から南並びに西の傾斜面に分布する若宮古墳群（25基）の主墳で，丘陵頂部の南西端に前方部を南に向けて位置する前方後円墳である。全長約39m，前方部幅約16m，高さ2.5m，後円部径約22m，高さ3.5mで，墳丘には葺石（ふきいし）がめぐらされ，前方部がやや低平な整美な原形を残している。埋葬施設は，未調査で不明である。三次盆地の前方後円墳の中では，古式の形態的特徴を示しており，5世紀前半若しくはそれ以前に位する可能性もある。宅地造成で破壊された西斜面の小円墳には，箱式石棺を内部主体とするものもあり，鉄製釣針1が出土している。西に江の川合流地点をはさんで，岩脇古墳群が望見される。		
県	史跡	日光寺住居跡	にっこうじじゅうきょあと		三次市十日市町字大久保	昭32.9.30	古墳時代後期の住居跡（竪穴住居跡）	方形（一辺4.5m，深さ30～40cm）	若宮古墳，花園遺跡の所在する同一丘陵の東南傾斜面に位置し，日光寺の参道工事によって，古墳時代の竪穴式住居跡3棟分がほぼ東西に並んで検出された。住居跡の規模は一辺4.5m（第1号），4m（第2・3号）で，地面を約40cm掘り下げ，4本柱によって構成される。中央に炉跡があり，北辺の中央部に竈（かまど）が設けられ，第1号では煙道も存在したと思われる痕跡がある。出土遺物には，土師器・須恵器・土製紡錘車などがあり，とくに第1号住居跡では土師器のみが出土し，第2号，第3号より古い可能性がある。出土須恵器の形態からみると，6世紀末頃の時期が想定される。なお，同一丘陵の東寄りには，同様な時期の横穴式石室が分布する。		
県	史跡	山家一里塚	やまがいちりづか		三次市山家町神之瀬	昭40.4.30			幕府が，慶長9年（1604）五街道に一里塚をおいたのにならい，広島藩では，寛永10年（1633）幕府の巡見使派遣に先立って，西国街道や，脇街道の整備に乗り出し，一里塚などを作った。この一里塚は，三次から布野を経て赤名峠にぬける雲石路にあるもので，西側の塚は失われている。東側のものは，塚及びその底部にある湧水の遺構が比較的よく現存している。上部にそびえるクロマツは，新道建設のため一部根を切断されているもの，根張り周囲17.20m，根回り周囲3.30m，胸高幹囲2.80m，樹高18.0mで「蟹足の松」の名で親しまれている。		
県	史跡	三玉大塚古墳	みたまおおつかこふん		三次市吉舎町三玉字大塚	昭53.10.4	帆立貝形古墳（竪穴式石室）	全長41m，後円部径33m，後円部高さ8m，造出部幅15m，造出部高さ2.2m	JR「吉舎駅」北東にある丘陵頂部（比高約70m）に所在する帆立貝形古墳である。全長41m，直径33m，高さ8mで，北に幅15m，長さ13m，高さ2.2mの造出部がある。周囲は周堤がめぐらされ，墳丘は20～30cm大の葺石（ふきいし）でおおわれ，円筒埴輪がめぐらされる。内部主体は盗掘によってその大部分が破壊されているが，竪穴式石室であったと考えられる。出土遺物としては，鏡2面を始めとし武器（刀・矛（ほこ）），武具（短甲等），馬具，玉類などがあり，東京国立博物館に所蔵されている。5世紀後半の古墳と推定される。備北地域では，帆立貝式の形態をなす古墳がかなり分布しており，その一つである。		関連施設：吉舎歴史民俗資料館 （0824-43-4400）
県	史跡	下本谷遺跡（三次郡街跡）	しもほんだにいせき（みよじぐんがあと）		三次市西酒屋町善法寺	昭56.11.6			中国自動車道「三次I．C」の南の丘陵上に位置する。 昭和49年（1974）に道路建設に伴う発掘調査によって，4時期にわたる堀立柱建物跡18棟，柵5条，土坑などが検出された。これらは正殿を中心にコの字形に建物を配し，これを柵で囲んだもので，地方官衙庁院（かんがちょういん）部の整然とした建物であることが明らかとなり，本遺跡は古代の三次郡街跡とみられる。出土遺物は，緑釉陶器（りょくゆうとうき），須恵器，土師器，須恵器転用の硯などがある。 道路西部の丘陵頂部のやや平坦な場所では，今からおよそ2万年以上前に堆積した姶良（あいら）火山灰層の下部あたりから流紋岩製，水晶製などの石器や剥片類（はくへんるい）が出土している。		
県	史跡	酒屋高塚古墳	さかやたかつかこふん		三次市西酒屋町	昭57.10.14	帆立貝形古墳（竪穴式石室）	径約34m，高さ約7mの円墳に造出し付設	古墳は，三次盆地西南方の西から東へ延びる丘陵先端部に位置する。北側は，はるかに三次市街地をのぞみ，南側は緩やかな谷間の低平地を控えている。古墳は，径約34m，高さ約7mの円墳の西側に造り出しをもつ全長40m級の帆立貝形古墳である。埋葬施設は，後円頂部に構築された割石積みの竪穴式石室である。しかし，戦前の昭和16年（1941）に盗掘されたため，現在では石室の一部しか残っていない。墳丘には埴輪がめぐらされ，石室内部から鏡，鉄刀，鉄鏃，鉄釘などが出土したとされる。鏡は中国製の画文帯神獣鏡で宮崎県持田古墳や熊本県江田船山古墳，三重県神前山古墳などから出土した鏡と同型の鋳型で鋳造されたものといわれる。5世紀後半の古墳と考えられる。		
県	史跡	高杉城跡	たかすぎじょうあと		三次市高杉町	昭59.11.19 平成27.1.13　追加指定			馬洗川を東に見る高杉の平野部の中央に位置する本城跡は，周囲の水田から4～5mの比高を有する微高地に立地する。城内には知波夜比古（ちはやひこ）神社があり，この周囲約70×70mに堀と土塁が残っている。堀は幅4～5m，土塁は高さ1～2m，幅3～4mの規模で，過去に堀底から鎧の一部が発見されている。戦国期には江田氏の支城として続いたようであるが，天文22年（1553）の江田合戦と呼ばれる戦いで，本城も攻略されている。 県内で20例に満たない方形館の一つであり，史料から落城した年代が特定できる県内唯一の方形館である。 平成24年度に城跡西側で試掘調査をした結果，城に伴う横堀跡を確認した。この堀跡は，高杉城跡を特徴付ける重要な構成要素である。横堀跡と南側正面の郭を追加指定することにより，城跡の一体的な保存を図る。		
県	史跡	糸井大塚古墳（糸井塚の本第1号古墳）	いといおおつかこふん		三次市糸井町	平6.10.31	帆立貝形古墳	全長約65m，後円部直径56m，高さ8～10m，造り出し部幅19～20m，高さ約3m	この古墳は，全長約65m，後円部直径56m，高さ8～10m，造出部幅19～20m，高さ3mで，墳丘の周囲に幅約30mの周溝（周庭帯）がめぐり，径100mを超える基域を有する県内最大の帆立貝形古墳である。墳丘には円礫による葺石が葺かれ，円筒埴輪や家形埴輪片が見つかっている。広島県は，帆立貝形古墳の数が全国で最も多い県であり，そのほとんどが三次地域に集中しており，このことは三次地域の古墳の特徴の一つである。三次地域の古墳時代社会，帆立貝形古墳の性格の解明，及び5世紀前半のこの地域における畿内政権の地方経営を考えるうえで重要な古墳である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	名勝	常清滝	じょうせいたき		三次市作木町作木字天楽371ノ1，372ノ4番地	昭35.8.25		高さ126m 荒波36m，白糸69m，玉水21m	常清滝は江の川水系の作木川の支流にかかる滝である。この渓谷は海抜500m前後の吉備高原面を浸食して形成されたものである。常清滝は灰白色流紋岩の断崖にかかる上下三段からなる滝で，上を荒波（約36m），中を白色（約69m），下を玉水（約21m）といい，あわせて約126mの高さをもっており，栃木県の華厳滝や和歌山県の那智滝よりも高い。上流域が台地で面積狭少のため水量において乏しく，滝つぼ，および周囲の規模がこれらに比べてやや貧弱であるが，中国地域では，このような高い滝は他に例がなく貴重である。 渓谷の植相は，コナラ・アベマキ・エノキを主とした落葉広葉樹で，景観的な四季の変化を楽しめる。		
県	天然記念物	東酒屋の褶曲	ひがしさけやのしゅうきょく		三次市東酒屋町字大久保	昭29.4.23			東酒屋松尾集落の北東方に通じる道路に沿って露出する。ほぼ水平に重なる第三紀中新世（2300～500万年前）備北層群（海成層）上部層の頁岩（けつがん）・細粒砂岩の薄互層が，正褶曲(しゅうきょく)・傾斜褶曲・転倒褶曲・等斜褶曲・横臥(おうが)褶曲などいろいろな形式の複雑な褶曲構造を示し，さらに断層をともない約200mの短距離の間によく認められる。		
県	天然記念物	吉備津神社のサクラ	きびつじんじゃのさくら		三次市甲奴町宇賀	昭30.1.31			本樹は，日本南部に普通に自生するヤマザクラで，吉備津神社の社叢の前面に雄大な樹冠を浮きたたせている。サクラとしては県内有数の巨樹である。なお，このサクラの開花は古来この地方の苗しろづくり開始の指標となっている。		
県	天然記念物	須佐神社のフジ	すさじんじゃのふじ		三次市甲奴町小童	昭30.1.31			本樹は，本州西部並びに四国九州に分布する日本特産種ヤマフジの白花品（シラフジ）である。社殿の北東方の林のそばにあり，2本のスギにからみついて登り，さらに隣接する他の1本のスギと1本のケヤキの樹冠をおおい，高さ25mに達する。フジでは県内有数の巨樹で，白い花が咲く。		
県	天然記念物	光永寺のカヤ	こうえいじのかや		三次市三和町上壱	昭30.1.31			本樹の主幹は，ほとんど真直ぐにのびており，地上9.5m付近で，西，南，北の三方向に初めて小枝を分かつ。それより約0.5m高でやや太い枝を北東方に出し，光永寺鐘楼をおおう。主幹は上に向って漸次細まるが，20m付近で急速に細くなる。樹勢は極めて旺盛で多数の果実をつける。本樹はカヤとして県内有数の巨樹であり，独立木の典型的な美しい樹形を示している。		
県	天然記念物	灰塚のナラガシワ	はいづかのならがしわ		三次市三良坂町灰塚字池の迫	昭35.8.25			ナラガシワは東亜植物区系域に分布する植物で，日本で近畿・中国・四国・九州に多い。現在では天然林はほとんど見られず，本樹のような樹高約16m，胸高幹囲3.51mの巨樹は極めて稀な存在である。樹冠は西風の影響を受けて西から東に向って僅かに傾斜し，所在地の気象条件を指標する風成形を呈する。		
県	天然記念物	熊野神社のシラカシ	くまのじんじゃのしらかし		三次市畠敷町字宮本	昭35.8.25			本樹は，熊野神社境内の拝殿東南方にある樹高約25m，胸高幹囲約4.8mの大樹で，主幹は真直で基部も目立つほどには太っておらず，上方に向って次第に細くなる。地上約5m高で北方にやや大形の枝を出し，さらに2m上方で二大支幹に分かれる。各支幹は多数の枝条に分かれてうっそうとした樹冠を形成し，枝は下方に垂れて，地上2m高までに及ぶ。シラカシとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	山家のヒイラギ	やまがのひいらぎ		三次市山家町字本谷	昭35.8.25			ヒイラギは関東以西・四国・九州・沖縄・台湾に分布し，林地に自生する常緑広葉樹であるが，本樹は庭園木として植栽されたもので，樹高約10m，胸高幹囲1.85mである。主幹は僅かに南に傾き地上約2m高で三大枝に分かれ，樹冠は南側に傾いている。本樹は雌株で，ヒイラギとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	上布野・二反田逆断層	かみふのにたんだぎゃくだんそう		三次市布野町上布野河名原，同大谷 三次市君田町石原字二反田	昭45.1.30			双三郡君田村の神之瀬川々畔から，同村二反田を経て布野村上布野の布野川々畔に至る延長6kmの東西系の一線を境に極めて顕著な地形変化が認められる。地形学上予想される断層線上の，布野村上布野町大谷川々岸，同戸河内寺谷，二反田新木谷川々床，同石原茂田川々岸，同西入君神之瀬川西岸等で断層露頭が観察されるが，それらは断層面傾斜の大なる逆断層で，北側の流紋岩・花こう斑岩などの基盤岩が南側の第三紀中新世（2300万年前～500万年前）備北層群上へ押し上げている。洪積世（170万年前～１万年前）末に形成された逆断層である。また断層落差は上布野で約250m，二反田で約90mと推定されるなど，中国山地形成の地殻変動史を明らかにするための重要な学術資料である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	摺滝化石植物群(暁新世)産地	すりたきかせきしょくぶつぐん(ぎょうしんせい)さんち		三次市作木町森山西	昭51.6.29			作木村摺滝川折戸橋南岸村道沿いの長さ11m，高さ3mの切取面に，砂質凝灰岩と薄層理を示すシルト質凝灰岩との互層が露出している。昭和27年（1952）の植物化石発見を契機に調査研究が盛んに行われ，摺滝化石植物群は学界の注目を引くようになった。 本指定地は，我が国における希少な暁新世（6500万年前～5700万年前）植物群であり，摺滝層形成時代に火山活動が激しかったことや，植物を保持した湖水等，当時の自然環境も明らかになり，地質学上，古生物学上貴重な価値を持つ。		
県	天然記念物	仁賀のシラカシ群	にかのしらかしぐん		三次市三良坂町仁賀	昭53.10.4			シラカシは常緑カシ類では最も寒気に強く，広島県では県北に近い内陸部に分布し，この地方の代表的なカシである。本シラカシ群は，樹高約20～30m，根回り周囲5.83mのものを主木に7本のシラカシが叢生し，一団となって樹冠を形成して特異なシラカシの森を示している。なお，主木はシラカシとして県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	敷名八幡神社の社叢	しきなはちまんじんじゃのしゃそう		三次市三和町敷名	昭55.1.18			本社叢は海抜約450mの山麓にあり，ヒノキ・スギ・アカマツ・モミ林などから構成されているが，主体はモミ林である。このモミ林は日本の中間温帯（中間針葉樹林帯）を代表する森林で，この地方本来の自然林の名残を示すものである。一般に県内の内陸部の社叢はシラカシは少なく，それに代ってウラジロガシが多いのも興味深く，学術上貴重な社叢である。		
県	天然記念物	西酒屋の備北層群大露頭	にしさけやのびほくそうぐんだいろとう		三次市西酒屋町字抜湯	昭56.11.6			備北層群大露頭は第三紀中新世中期（1600万～1400万年前）のもので，海成備北層群と非海成塩原町累層が一連整合であることが実証された。備北層群は県北に広く分布する地層であり，この大露頭からはカキや巻貝などの化石を始め径10cm前後のコハクが数多く産出されている。備北層群と塩原町累層の一連の地層がこの大露頭で観察できる場所は他に例がなく，備北層群の形成史を知る上で重要である。		
県	天然記念物	三次の地蠅産地　※蠅は旧字	みよしのちろうさんち		三次市高杉町来原	昭58.11.7			三次産地蠅は，馬洗川にかかる神和橋から下流の250mの来原河原で発見された我が国で最初の天然産の蠅である。外国での地蠅は第三紀（6500万年前～180万年前）以前の地層で油田や炭田に関係なく，第四紀層（約4万年前）の地層から産出した点で新しい型の産地であり，学術上貴重な価値がある。		
県	天然記念物	東酒屋の海底地すべり構造	ひがしさけやのかいていじすべりこうぞう		三次市東酒屋町敦盛	昭60.12.2			海底地すべり現象を示す東酒屋の露頭は，「備北層群の大露頭」の南東約2kmの位置にあり，化石を多産している「備北層群の大露頭」の上部層に相当する地層である。海底地すべり構造の見られる地層でこれほどの大規模なものや，その地すべり構造の多様性をもつものは広島県では他に例がなく，学術上極めて貴重なものである。		
県	天然記念物	迦具神社の大イチョウ	かぐじんじゃのおおいちょう		三次市作木町香淀字神田	平2.12.25			作木町南部の香淀にある迦具神社のイチョウは，樹高約32m，胸高幹囲7.28mで，四方に枝を広げてその樹冠は舞殿と拝殿の両方の建物にまでかぶさっている。樹冠はほうき状に開いた上半部と，球状にまとまった下半部とに区分される。樹齢約500年と推定される。 この樹の下半部の球形の樹冠は，主幹の分岐部付近から発生した不定芽の繁茂したものと認められ，ここには，ラッパ状，コップ状，フクロ状などと表現される畸形葉（きけいよう）すなわち杯葉（杯状葉）が見られる。県内有数のイチョウの巨樹であるばかりでなく，杯葉をつける点で全国的にも珍しい例である。		
県	天然記念物	森山のサイジョウガキ	もりやまのさいじょうがき		三次市作木町森山中字西谷	平2.12.25			森山のサイジョウガキは，樹高約22m，胸高幹囲（地上1.3m高）3.44m，樹高22.00mで，3.5～4.0m高で大小の4支幹に分かれて上向きに伸び，更に上方で小枝を分けて，短円筒形の樹冠を構成していた。推定樹齢350年。		
県	無形民俗文化財	神楽―鈴合せ―	かぐら―すずあわせ―		三次市作木町	昭35.3.12			この舞いは「やよし」とも言われるが，八つの舞方を組み合わせているところから「八寄(やよせ)」が訛ったものであろう。 烏帽子をかむった4人の舞人によるこの舞は，「一つの舞」は剣と鈴を持ち優雅に，「二の舞」はそれに跳躍を加えて華やかに舞う。「三の舞」は休止が多く静かに，「四の舞」「五の舞」はあるいは前後に飛び，あるいは円形に歩いて変化があり，「六の舞」は歌と舞が分離し，「七の舞」は採物を杖にして，それを両手に持ち種々の形をつくり，その上を飛んだりくぐったりする。「八の舞」は早い調子の舞であるが，採物は再び剣と鈴になり締めくくりとなる。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	無形民俗文化財	辻八幡の神殿入り	つじはちまんのこうどなり		三次市吉舎町	平9.5.19			この行事は，伝承によれば天明年間（1781～1789），打ち続く凶作に「神だのみ」の一念で灯籠を献じて豊作を祈願したことに由来するといわれている。 今では，毎年10月12日の夕方から深夜にかけて行われ，辻地区の約100戸の氏子が各家から6～8個の点火した灯籠を笹竹につけたものをもち，組ごとに三々五々神社へ向かうものである。約千個の赤や緑の灯籠が参道を鮮やかに彩りながら一斉に雌子にのって丘の上の神社へと上がっていく。神社にたどりつく，境内に入る前に神職のお払いを受け灯籠を神社に奉納してこの行事を終わる。 このような行事は馬洗川上流域に限られており，世羅西町の稲荷神社に伝わる「神殿入り」も昭和48年（1973）に県の無形民俗文化財に指定されている。		
県	無形民俗文化財	三次鵜飼の民俗技術	みよしうかいのみんぞくぎじゅつ		三次市十日市親水公園馬洗川	H27.4.27			「鵜(う)匠(しょう)・舵子(かじこ)・鵜」三位一体の漁業として確立した三次鵜飼は，観光化されながらも伝統的な技術をおよそ400年にわたり伝えてきた。その技術は父子相伝で伝えられた。 鵜匠制度で保護されてきた長良川鵜飼などと異なり，三次鵜飼には多くの漁獲を得るため編み出された鵜飼技術の変遷過程が認められる。鵜船(うぶね)を改良し操業域を拡大させ，篝火(かがりび)を松明(たいまつ)から苧殻(おがら)へそしてカーバイトに替えて漁獲量を上げた。日本一長いとされる手綱(たなわ)で6～7羽の鵜を操る技術や，複数の操船法を開発したのも漁獲を上げるための工夫であった。鵜を飼育・訓練する技術にもそれが窺える。		関連施設：みよし風土記の丘ミュージアム（広島県立歴史民俗資料館） （0824-66-2881）
国	登録有形文化財（建造物）	三次市歴史民俗資料館（旧三次銀行）	みよししれきしみんぞくしりょうかん（きゅうみよしぎんこう）	1棟	三次市三次町	平9.5.7	鉄筋コンクリート造，2階建，陸屋根，昭和2年（1927）建築	建築面積190㎡	当初銀行の社屋として建てられ，現在は三次市歴史民俗資料館として利用されている。入口正面のカウンター奥に窓口事務室が広がり，二階部分をバルコニーの付いた吹き抜けとしている。簡素ではあるが柱頭飾りなどのアクセントのある外観で親しまれている。		
国	登録有形文化財（建造物）	田中写真館	たなかしゃしんかん	1棟	三次市吉舎町吉舎	平9.12.12	木造地上3階地下1階建，昭和3年（1928）建設	建築面積98㎡	木造モルタル三階建の写真館である。むくり屋根を柱頭飾付きの円柱で受ける玄関部，ペディメント（妻・破風）に設けたカイゼル髭を型取ったユニークな2連の窓などを用いた特異な造形になる。設計施工は地元の棟梁吉川惣一であったことが棟札からうかがえる。竣工時から話題となり，今も広く親しまれている建物である。		
国	登録有形文化財（建造物）	照林坊本堂	しょうりんぼうほんどう	1棟	三次市三次町	平23.7.25	木造平屋建，瓦葺，建築面積629㎡		境内の中央に東面して建つ。外陣と内陣，余間からなり，正面に広縁を設け，周囲の縁先に庇柱をたて，背面に後堂を設ける大規模な真宗本堂。入母屋造本瓦葺で，正面に向拝を付設。矢来内がなく，また当初は正面縁を側面前方へまわすなど，特徴的な平面となる。		
国	登録有形文化財（建造物）	照林坊客殿	しょうりんぼうきゃくでん	1棟	三次市三次町	平23.7.25	木造平屋建，瓦葺，建築面積196㎡		本堂の西南に位置する。入母屋造妻入本瓦葺，正面に唐破風造玄関を付け，周囲に下屋をまわす。内部は対面所と，座敷飾りを備える座敷に二分され，対面所は大トコを構える17畳半で，側面に鞘の間，前方に玄関の間を付ける。近代における真宗対面所の一例。		
国	登録有形文化財（建造物）	照林坊御成の間	しょうりんぼうおなりのま	1棟	三次市三次町	平23.7.25	木造平屋建，瓦葺，建築面積117㎡		客殿の東南に廊下を介して続く。入母屋造桟瓦葺で，周囲に下屋をまわす。東西に三室を並べ，周囲に縁をまわし，南背面に浴室や便所を付設する。東端を主室とし，トコやトコ脇，付書院を構える。各室に棹縁天井を張り，砂壁として，落ち着きのある設えをなす。		
国	登録有形文化財（建造物）	照林坊庫裏	しょうりんぼうくり	1棟	三次市三次町	平23.7.25	木造平屋建，瓦葺，建築面積315㎡		本堂の後方に位置する。切妻造妻入桟瓦葺で，北・東面に下屋を付ける。桁行22m梁間14mの大規模な庫裏で，正面寄りに土間を設け，東を大戸口，西を勝手口とする。居室部は梁行を三分して東列に畳敷を並べ，南奥に御内仏がある。近世の本格的な庫裏建築。		
国	登録有形文化財（建造物）	照林坊渡り廊下	しょうりんぼうわたりろうか	1棟	三次市三次町	平23.7.25	木造平屋建，瓦葺，建築面積60㎡		本堂と庫裏を繋ぐ東西棟の廊下。桁行21m梁間2.9m，両下造桟瓦葺。高く床を張り，化粧屋根裏天井，側柱筋には高欄を付ける。花頭窓を穿つ漆喰壁で南北に間仕切り，複廊とする。床下も中央筋に壁を設け，仕切る。寺格の高さを窺わせる建築。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	照林坊経蔵	しょうりんぼうきょうぞう	1棟	三次市三次町	平23.7.25	土蔵造平屋建，瓦葺，建築面積20㎡		本堂の東北に南面して建つ。方3.8mの土蔵造，宝形造桟瓦葺で，一間向拝を付ける。鉢巻上に台輪を置き，出三斗組とし，中備に蟇股を飾る。軒は一軒繁垂木。内部は一室の板敷で，格天井を張る。見応えのある組物や蟇股，彫刻などが各所に配される。		
国	登録有形文化財（建造物）	照林坊鐘撞堂	しょうりんぼうかねつきどう	1棟	三次市三次町	平23.7.25	木造，瓦葺，面積16㎡		本堂の東南に位置する。切石積基壇に建つ桁行一間梁間一間の吹放ち鐘楼。入母屋造桟瓦葺。礎盤に粽付円柱を内転びにたて，貫や台輪で固め，尾垂木付二手先斗きょうを組む。柱間中央にも斗きょうを置き，その間に蟇股を飾る。二軒繁垂木。近世建立になる良質な鐘楼。		
国	登録有形文化財（建造物）	照林坊山門	しょうりんぼうさんもん	1棟	三次市三次町	平23.7.25	木造，銅板葺，間口3.3m		本堂の前方に位置する。間口3.3mの四脚門。切妻造銅板葺で，正・背面に軒唐破風を付ける。組物は支輪付の出組で，正・背面は詰組に配する。二軒繁垂木。妻虹梁大瓶束。格天井を張り，両開板戸をたてる。縁形は複雑で，絵様も繊細で手が込んでいる。		
国	登録有形文化財（建造物）	旧万寿之井酒造酒造蔵	きゅうますのいしゅぞうしゅぞうぐら	1棟	三次市三次町	平29.5.2	木造2階建，瓦葺，煙突付	建築面積298㎡	西城川の右岸に位置し，長大な立面を見せる酒造蔵。桁行31メートル，梁間9.8メートルで，煙突が附属する。後補の南4間分は1階を検査室と培養室，2階を麹室とし，北側は1階を仕込蔵，2階を酒母蔵とする。河港として栄えていた三次の歴史を今に伝える。 明治前期／昭和前期増改築		
国	登録有形文化財（建造物）	明覚寺本堂	みょうかくじほんどう	1棟	三次市吉舎町吉舎	令6.3.6	木造平屋建、瓦葺	建築面積284㎡	石見銀山街道の吉舎（きさ）宿にある真宗寺院。東面して建つ本堂の東南に鐘楼、山門を配する。本堂は東京の両国にあった松井角平事務所設計の慈光院本堂を移築したもの。七間堂で外陣は土間をコの字に廻らした斬新な平面とする良質な近代和風の本堂。鐘堂は基壇上に建つ一間四方入母屋造り。三斗を組み、中備は蟇股、軒は一軒繁垂木。山門は四脚門。冠木の上方に前後の控柱を築ぐ頭貫を通した特異な形式。通りに面して建ち、地域の歴史的景観をつくる。		昭和3年／令和2年移築
国	登録有形文化財（建造物）	明覚寺鐘堂	みょうかくじしょうどう	1棟	三次市吉舎町吉舎	令6.3.6	木造、瓦葺	建築面積6.8㎡			明治25年／昭和中期改修
国	登録有形文化財（建造物）	明覚寺山門	みょうかくじさんもん	1棟	三次市吉舎町吉舎	令6.3.6	木造、瓦葺	間口2.8m			明治2年